
太陽の光

カオス君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の光

【Nコード】

N2109B

【作者名】

カオス君

【あらすじ】

太陽は時に神聖な光をはなつ。主人公の桜井ユウヤが自分を送ってきた人生について話し、最後に・・・

ときには太陽は神聖な光をはなつ。

青く光るこの頭上の空間、雲ひとつないこの空の下を歩く僕。

これからどうしようか、そう考える僕は冷たい風に吹かれ二十五年そだった家をあとにした。

そして今日から暮らす新しい家にむかった。

今日から僕は一人暮らしを始めることになった。いや、そうする以外になかった。

僕の両親の僕に対する扱いが悪かったためそうする以外になかったのだ。

まあ。ようするに家出つてわけだ。

もうあとにはもどれない。

腕に付けている時計を見ると針が十二をさしていた。

昼飯食いにいこう。

高校に通いはじめてから友人と行くようになった商店街。

自分の家からは近くもないが遠くもない場所にあった。

その存在に気がついたのは高校に入学してから少したった六月のことだった。

どこを見ても知らない人ばかり。まるで小さな箱のなかに閉じ込められて見せ物にされているようだった。

そのころ僕は本ばかり読んでいた。高校一年の春のことだった。一日なんども同じ本を読んでいた。もちろん飽きることはない。

でも楽しいわけではなかった。退屈のぎにはちようどよかった。

「ねえ」

その一言が僕を変えた。

「何を讀んでるの？」

そこには少し背が小さくて髪が短い男子生徒がいた。

「なんだっていいだろ。」

「そっか」

そう言うときまた別の話題を出した。

名前は山崎康。でも僕はコウと呼ぶ。コウはとても素直なやつで僕はそこが気に入りそして今日から僕の友人になった。

そしてその日の下校中にコウが、

「ちょっと寄り道してかない？」

と聞いてきた。

「この近くの商店街なんだけど、売っている物はどれも安いし色々あるよ。」

「ふーん、じゃあ行ってみようかな。」

そういうとコウはうれしそうに、

「わかった。中は案内するよ。」

商店街はそこそこにぎわっていた。

コウの案内のおかげで大体の店の場所がわかった。

以外にもコウは案内するのがとても上手だった。

プロのガイドよりもずっと。

将来ガイドになると絶対にうまくいくはずだ。

「なあ、コウ。」

するとコウはそらに指を差して。

「あ、鱗雲。」

「あ、ほんとだ。三日後雨降るな。」

「うん、そうだね。」

これが僕とコウの出会いだった。

それから十年たった今もこのにぎわいはなくなり、明るい商店街のままだった。

コウとの思い出はほかにもあるがここでの出来事が一番印象に残っている。
なんせコウと友人になってから一番最初に来たのがここだからだ。
あいつのおかげで僕はここまで性格が明るくなったんだ。
そうあいつのおかげで。

七月になるとみんな夏休みの話題でいっぱいだった。そして僕とコウもその話題をしていた。

「なあ、コウは夏休みにどこか行く予定はあるのか？」

「いや、別がないよ。」

「じゃあ、僕と一緒に宿題やるために旅行に行かないか、一緒にバイトしてお金をためてさ」

「それいいね。」

そして僕とコウは七月十九日からバイトを始めた。
バイトは近くのコンビニですることになった。

ピンポン

よくありきたりの音がする。

「いらっしやいませ」

僕がそう言う。

そしてお客さんがレジカウンターに商品を置く。

そして僕は値段を計算し、

「1,350円になります。」

と、いいおつりをわたす。

「ありがとうございます」

と言うと、お客さんは帰っていく。

コウもまた同じことをする。

そうやって、時給800円の仕事を一日五時間働いた。
この調子で七月中には二人で大体十二万円は貯まった。

でも、その期間中に一つ気掛かりな出来事があった。それはいつまでも降り続ける大雨の日だった。

今日は珍しくコウがバイトを休んだ。どうも風邪らしい。

今は五時。いつもならお客さんが沢山来るのに大雨のせいかまったくコンビニ内にはいない。いるとすれば、店員である僕、雑誌を読む中年男性。高校生らしき人物が二人夕食を選んでいた。ピンポン

「いらっしやいませ。」

入ってきたのは一人の少女。

背が低くて、長くのびた黒い髪が雫をたらしている。どこかコウに似ている少女だった。

少女は薬品コーナに行き小さな箱をとりすぐにレジにきた。小さな箱には風邪薬と書いてある。

少女はお金を払ったらすぐに大雨のふる外に出ようとした。

「ちよつとまって。」

僕は呼び止めた。

「傘をもっていったほうがいいんじゃないか？」

すると少女は重そうな口を開け

「お代は？」

と、聞いた。

「僕のおごりだよ。ほら風邪ひくとよくないしさ。」

「ありがとう。」

そう言う外に出ていった。

その後雨はすぐ止み、少女はコンビニに来ることは無かった。

今日は八月三日、バイトをやって十五日たった。

「全部で十二万だな。」

「うん。」

僕とコウはどこにいこうかわくわくしていた。

あとはどこに行くかを決めるだけだ。

「さて、どこにしようか。」

「北海道なんてどうか。」

「たしかにいいかもしれないけど、飛行機代とかがかかるとか、あまり高い水

テルには泊まれないぞ。」

「そっか。」

コウは納得してくれた。

「京都なんてどうか。」

「いいんじゃないかな。近いし。」

たしかに京都なら電車で五、六時間でつくからな。それに清水寺にも行ってみたいし。

「じゃあ、持っていく物は宿題は忘れずに、あとは自己判断で。」

「わかった。」

ということ、旅行に行くのが八月十五日になった。

昼ご飯はコウと一緒によく行ったラーメン屋『みそ』にした。

名前のとおりここでは味噌ラーメンがおいしい。と言うか、味噌ラーメンしかない。

それにこの商店街にはこのラーメン屋の他にはラーメン屋ない。

店内に入ると十年前と変わってなかった。ゆういつ変わったところはメニューが増えていたってとこだけだった。味噌しかなかったはずのメニューに醤油、塩、ネギ、トンコツ、キムチ、そして味噌と書いてあった。

カウンターの向こうにはかつての職人ではなく若い店員になった。

その職人とは多田光邦（ここではミツクニと僕は呼ぶ）って名前の職人のことだ。なぜ職人と呼ぶのかはミツクニさんがそれだけラーメンにこだわりをもち、それだけおいしいラーメンを作ることからこの商店街の人はみんな職人と呼んだ。

「あのー、職人はどこにいますか？」

と僕は若い店員に聞くと、

「なんですか、職人って。」
と返ってきた。

まったく予想外の返答だった。

「多田ミツクニさんですよ、いるんだろ。」

「お父さんなら死にましたよ、三年前に。」

お父さん？

ああ、あの時店の奥で働いていた子か。よく味噌以外のラーメンを作りたいつて言って毎回怒られていた光景を今でも覚えている。

その時はたいていコウと一緒にいた。

ある時一度だけなぜ味噌以外を作らないか聞いたことがあったが答ええてくれなかった。

「そうですか。」

ミツクニさんも結構年をとっていたから死ぬのも無理もなかったのかも知れない。今生きていれば百歳くらいになるのかな。

その後、味噌ラーメンを食べて商店街をあとにした。

がんばれよ、二十歳の若い店長。

さようなら、思い出の商店街。

今、僕は鳥取の駅でコウを待っていた。

現在七時二十分、待ちあわせ時間より十分早い。

僕はたいてい待ち合わせ時間より十分ほど早くきて待っているのが普通だった。

コウが来たのは僕が来てから五分たった七時二十五分だった。そのおかげで予定より早く出発した。

この旅行は一泊二日で一日目はずっと夏休みの宿題をやり、二日目は朝八時に起き昼十二時まで建物をまわり、その後昼食をとりしだい新幹線にのり家に帰る。

新幹線の席はコウは窓側で僕はその隣に座った。外は明るい日

差しが地を照らし熱そうだった、だがたまに木が騒めかせる風は涼しそうだった。そんな景色を僕とコウは見ていた。しばらくすると京都の駅に着く。僕達はこれから泊まる旅館へむかった。

渡月川と呼ばれる大きな川をずっと西に行くとその旅館があった。旅館には大きく『ホテル 嵐山』と書いてあった。

なかなかいい場所であり、旅館の出入口の前に小さな道路がありその先には川がある。その川を左に行くと車が横に二台走っても少し余裕があるくらいの橋がありその橋を渡って向こう岸に行くと小さな公園があった。

僕とコウは旅館に荷物を置いてからその公園に行った。僕とコウは勉強前には散歩に行く週間がある。何故かそうすると集中できる。

現在午前九時、これから長い勉強が始まるうとしていた。

まず最初にはじめたのが数学だった。

数学は量が多いが僕とコウは数学が得意なのですぐに終わるはず。刻々と過ぎていく時間。時計を見るとすでに十二時を回っていた。どうやらコウは数学を終わらせ一番得意な国語に入っていた。コウは文系、僕は理系が得意で五段階、いつも四以上をとっていた。僕も数学が終わったので次に化学に取り掛かることにした。

僕は化学は五以下はとったことはない。それに先生がカスなのでいつもバカにできる。なんなら僕がかわりにみんなに教えてやってもいい。当然だ、そんなこと。

「ねえ。」

コウが話し掛けてきた。

「将来何になりたいか考えているの?」

「医者だよ。」

「なんで?」

「当然、高収入だし失業はしないだろうしね。」

「ふーん。」

「コウはどうなんだ。」

「僕は弁護士になりたいな。」

「コウならなれるさ。」

「コウヤだって。」

そして僕達は黙って残る宿題を始めた。

再び時間が流れた。

僕達が宿題を終えたときにはすでに日が変わっていた。

現在二時。

あんなに明るかった外も真っ暗になりしんと静まり返った夏の京都。さっきまで鳴いていたひぐらしはどうしたのだろう。

旅行二日目。

朝起きると時計は十時半をさしていた。コウはまだすやすやと気持ち良そうに寝ていた。もう建物を見る余裕も無くなっていた。

「おいコウ、新幹線に遅れるぞ。」

「うーん、あと五分。」

よく漫画とかであるよくありきたりの台詞を言うコウ。そういえば前にコウの家に行ったときにたくさん漫画があったな。

「おい、早く起きろ。」

「うーん、わかったよ。」

その五分後にコウは起き、今はその辺でタクシーに乗せてもらい京都の駅に向かっていているところだ。

「ったく、起こしてるんだから早く起きろよな。」

「ごめんごめん」

「まあ、いいけどさ。」

京都の駅につくと僕とコウはもうダッシュをしてなんとか間に合った。

これがコウと一緒にいった最初で最後の旅行だった。

十月になると文化祭のシーズンになる。この学校の文化祭は二日間やる。

そして僕は映画鑑賞をやることになった。

一日目も二日目も僕もコウもやるべき仕事はないので二人で体育館に行くことになった。体育館では軽音楽部によるバンドや吹奏学部による演奏、演劇部による演劇、ほかにもクラスの出し物などがあった。

クラスの打ち合せが終わると僕とコウはすぐ体育館に向かった。

体育館は真っ暗でステージだけが明るかった。どうやらすでに出し物が始まっているようだった。

最初に見たのは軽音楽部によるバンドのコンサートだった。

言っちゃ悪いけどへたくそな歌だった。歌詞にも深みが無かったしとにかく叫んでいたり、所々棒読みで、まあ一言で言えば最低のボーカルだった。ほかのギター、ベース、ドラム、シンセはそれなりにうまいが、ボーカル一人のせいで台無しだった。

観客席からも

「帰れ。」

とか

「引つ込め。」

とかの批判の声しかない。多分来年はあのバンドは文化祭にでないだろう。

次に見たのは吹奏学部の演奏だった。この学校の吹奏学部は結構いい成績を残しているのでちょっと楽しみにしている。

吹奏学部の演奏はすべてオリジナルの曲で男子四人、女子四人でソプラノ、アルト、テノール、バスの四パートによる四部合唱だった。一曲目は『月夜』という曲だった。

その曲は大体五分くらいの短い曲だったけどその曲は全体的に暗く、どこか希望を求めるような歌詞だった。

二曲目は『流れを失った川』という曲だった。

とにかく長い曲だった。歌詞も長く、その歌詞だけで薄い文庫本が完成するほどだった。

そして最後の曲は『冷たい視線』という曲で、他の二曲とはちがった。

何ていうかオペラに似ている。ソプラノは極端に声が高く、なのに音を崩さず安定した声だった。アルトとテノールは声のやわらかさを保ちつつうまく歌の音色を出していた。バスの二人のうち一人がバリトンに変わり迫力のある声を出していた。

合唱が終わると体育館は大きな拍手が響き渡った。

曲が終わると同時に僕の携帯のバイブがなった。

メールが一件着信していた。

『ごめん、ユウヤ。急にだけどクラスの仕事をやってくんない？ コウも一緒だったら一緒に来て。byアキコ』

「コウ、教室に戻るぞ。」

教室に戻るといかに悪そうな人が三、四人が一人のクラスメイト、加藤マサシを囲んでいた。どうやら絡まれてるらしい。

「いったい何があったんだよ。」

「ああ？何ダてめー。」

一人のちんぴらが言った。

あまりにも変なしゃべり方なので僕はちよつと笑ってしまった。

「今笑つタロてめー。」

「だって変なしゃべり方なんだもん。それにハゲ、毛無し、チキンヘッド。」

右からちんぴらの髪型の特徴を言っていた。

「これはハゲじゃねー。」

「毛無しとか言うな。」

「ち、チキン……。」

この挑発にのれば一発殴られあとはよければ僕は完全に被害者だ。

「なめんな。」

ちんぴらの一人、ハゲが殴りかかってきた。僕はわざと殴られ地面に倒れた。

「やっちまえ。」

チキンヘッドが言い蹴りかかってきた。

右足での蹴り、僕は左に飛び避け後ろに回り込んだ。このままローキックを食らわせると相手の態勢を崩しあとはボコ殴りすれば勝てるがあえてそうしなかった。ここは学校、教師に見つかったら大変だからだ。だからパンチまたは蹴りを一発わざと食らいあとは避ける、あるいは受け流す。その辺のちんぴら四人の打撃、親父に比べたら簡単に避けられる。

ちんぴらの打撃を避け始めてから十分後、僕のクラスの担任の斎藤マサルが止めに入った。

その後、ちんぴら達は警察に連行された。僕は先生に起こられたが別に大したことはしてない。

あとマサシは、僕にお礼を行った後、仕事を続けた。

ちよっとトラブルがあったが無事、一日目が終わった。

二日目、コウは風邪で学校を休んだので僕一人で文化祭をまわることにした。

いざコウがいなくなると暇なもんだな。

そう思いながら校舎の一階を歩いていた。校舎は二階建てで小さい。

一階は一、二年生の教室があり、二階は三年生の教室と特別教室があった。

つまり、この階は一、二年喫茶店やらカラオケボックスやらがあるってわけだ。

しばらく歩いていると、前から見覚えのある連中が三人歩いてきた。

中学生の時の友人だった。

「おう、ユウヤじゃんか。久しぶりじゃんか。」

「おうサトル、久しぶり。ワタルもカイも。」

サトルは小学生の時から友人でとにかく力が強い。おそらく今は柔道でもやってるんだろう。

ワタルは何でもテキトウにやるやつだ。でもテキトウにやってもこいつは成績がいい。五教科はいつも五段階評価でオール五をとるほどだ。一度勉強を教わったことがあるが

「テキトーにやればできる。」

つて言つて終わりだった。

カイはちよつとコウに似ている。背は低いし影も薄い、でも僕と同じで理系が得意で文系が苦手。

「よしカラオケ行こうぜ、カラオケ。」

「ちよつと待てワタル。」

「いいから、俺がおごつてやるから。」

ちよつとまで文化祭のカラオケはお金がかからないんだよ。

そう言おうとしたのに、ワタルは強引に僕の手を引きカラオケにつれてかれた。

「なんだよ、カラオケのくせに個室じゃないのかよ、いや、歌っちゃえ。」

はじめに歌つたのはワタル。

こいつは中学生の時に男子のくせにアルトのパートを歌っていた。

そのわりに声はきれいで先生も生徒も啞然としていたほどだ。

「ほらユウヤ、おまえ下のパートを歌えよ。」

「はいはいわかったよ。」

それにしても久しぶりに歌うことになった。

歌を歌い終わると、部屋にいる人全員がこつちをむいていた。

「ずっげー。」

とか

「歌うまいな。」
とか言う人がいたそしていつのまにか四人全員が歌っていた。
何曲か歌った。
夕方に僕達は歌い終えた。
「いやー、楽しかったな。」
「つかれたよ。久しぶりだよあんなに歌ったのは。」
「それにしても腹へった。」
「だよね昼食、食べてないからな。」
そしてそのあと焼肉屋でパーツと騒いだ。

二学期の終業式を終え、明日から冬休み。
「そういえばユウヤ、冬休みに何か予定はある?」
コウが僕に聞いてきた。
「ないけど特に。」
「じゃあさ、僕の家に来ないか?」
「別にいいけど、家の人は大丈夫?」
「大丈夫だよ、昨日僕の両親に聞いてみたらぜひそうしろって言うていたし。」
「わかった。じゃあいつ行けばいい?」
「基本的にはいつでもいいよ。ユウヤは?」
「僕もいつでもいいよ。」
「じゃあ十二月二十日に二泊三日で大丈夫?」
「ああ、大丈夫だよ。」
こうして冬休みのスケジュールが一つ埋まった。

十二月二十日、コウの家泊りに行った。
コウの家は小さな二階建の一軒家だった。
「ピー、
インターホンらしきボタンを押すと警報のような音がした。
「はい。」

女の人の声がした。おそらくコウの姉か母親だろう。

キー

鉄がさびたような音をたてながら家の扉が開いた。

「あれ？コウの言っていた友達？」

そこには茶色の短い髪をした女の人がいた。

「あつ、はいそうです。桜井ユウヤと言います。」

すると女の人の後ろからコウがやってきた。

「やあ、ユウヤ。さあ上がってくれよ。」

「うん、わかったよコウ。」

コウの家にはおもしろいものが沢山あった。

油絵、彫刻、焼き物などの芸術品や骨董品が置いてあった。

油絵はどれも見たことの無い絵ばかりだった。

コウの家族が書いたのだろう。結構興味があるので後で見にくることにしよう。

コウの部屋はいたってシンプルで本棚が一つ、ベッドと机があるだけだった。

「ユウヤはベッドと布団どっちがいい？」

「布団でいいよ。」

「わかった。」

「ところで壁にかかっていた絵は誰が書いたの？」

「僕と母さんだよ。」

「コウも書いてんだ。」

「うん、あまりうまくないけどね。」

「見せてくれない？」

「いいよ。」

そう答えるとコウは部屋のすみにある扉のノブに手をかけて、

「こっちから僕のアトリエにいけるよ。」

コウのアトリエは広く部屋の倍はあった。

中にはいった瞬間、油の匂いで僕の頭をくらつかせる。所々にある絵は完成しているものである。そして奥に布がかかっている絵が一枚あった。

「なあコウ、あの布がかかっているのは何だ？」

「ああ、あれは見ちゃダメだよ、大切な絵なんだから。」

「ふーん、ところでおまえはさつきから何やってるんだ？」

コウはさつきから色のついた粉と油をガラスのスリコギみたいな物で粉をつぶしたり混ぜたりしている。

「絵の具を作ってるんだよ。」

「チューブは使わないの？」

「そうだよ、この方が絵のアイデアが浮かぶんだよ。」

「ふーん。」

それから僕は五時間ほどコウが絵を書いているところを見ていた。

絵を書いている目はいつもと違った。表情がなくまわりの音を一切気にせず、とにかく自分の書いている絵を見つめ筆を動かしていた。すごい集中力だった。

たまにトイレにむかうときもあくびをしても、本を読んでもまったく気にしていなかった。もしかしたら絵書きの天才といえるだろう。

夜、僕はコウの部屋でコウと一緒に寝た。コウがベッドで僕は布団で。

僕達は布団に入るといんなことを話した。

そして話の中には芸術の話、将来の話などだったが、コウの口から恋愛の話が出てきた。

「ねえコウヤ、おまえは好きな人とかいるか？」

そんなことを聞かれたのは初めてだった。

「コウはどうなんだよ。」

「僕は同じクラスの金沢アキコ。」

あいつか、って言ったら怒るだろうな。

「そうなんだ。」
「ユウヤはどうなんだ？」
「いや、そんなこと考えたこともないよ。」
「ずるいぞユウヤだけ。」
「いや本当だって。」
「どうだか。」
「で、どこまでいったんだ。話し掛けたりしたか？」
「いや、まだだよ。三年になったら告白するつもりだよ。」
「そっか、がんばれよ。」
そして僕は眠りについた。

深夜、トイレに行くために目が覚めた僕。

コウの部屋からでてまっすぐにいくとベンチがあった。やっぱりコウの家にはおもしろいものがあった。

トイレからだとベンチにはあの茶髪の女の人が座っていた。

「こんばんわ。」

「こんばんは。」

「となりいいですか？」

なぜか眠いのにそう聞いてしまった。

「どうぞ。」

僕はベンチに座った。

「あの、ユウヤさん。」

「何ですか？」

「ありがとうございます。コウと友達になってくれて。」

「いえ。」

「あなたと友達になる前のコウはいつも絵ばかり書いていました。とても暗い絵でした。見るだけで寒気がするような絵でした。でも、今年、六月から突然、本当に突然明るい絵を書き始めたのです。」

「その原因は僕ということですか？」

「はじめはきがつかなかったのですが、どうやらそうでしょう。」

「ところであなたはコウのお母さんですか？」

「はいそうです。いや仮にそうといえます。」

「仮に？」

「はい、私は今、三十五歳です。」

「はあ。」

「でも、その年令は仮の姿で本当は二十五歳です。」

「でも、それって。」

「そう、それでは私がコウを八歳の時に生んでいることになります。でもありえないでしょう？」

「でも養母ってことも。」

「いえ、それはないです。私とコウは血のつながりがあります。」

「それってもしかして姉？」

「はい、そうです。コウには私をいれて三人の兄妹キョウタイがいます。長女である私、カズミ。長男であるコウ。そして次女でコウの妹のヒサエの三兄妹です。そしてコウはこのことを知りませんのでコウにはこのことを言わないでください。おそらく、大変なショックを受けると思っています。」

「わかりました。」

そして僕はコウの部屋にもどった。

その後の二日目、僕は朝早くコウの家のまわりを歩いていた。

「にゃー」

「ん、猫？」

コウの家の近くにある大きな木に猫がいた。

「にゃー」

その猫は僕を見て鳴いた。ついてこいと言っても言おうとしているのか。ひとまず僕は猫についてくことにした。

てくてくと歩いていく猫、そしてそれについていく僕。そして普通に流れる時間。

現在七時、猫について行って二十分、僕はあるところについた。
そこは海だった。

無論、その海は日本海だ。僕と猫はある岬にいる。そこはあの商店
街の裏にある小さな林の奥にあった。

太陽は時に神聖な光をはなつ。

そこはいつたい・・・。

雲の間から降り注ぐ日の光。

空気中の水蒸気なを反射していくつもの光の筋が海に降る。

ときどき雲が動き光の筋が動き傾き。

今まで見たことのないその光景は神聖なものに思えた。

そこで僕は思いついた。

コウの告白が成功したらこの場所でふたりつきりにしてあげよう。

そう思つて、僕は三年になることを待ち望んだ。

その後、僕はコウの家に戻りコウの母（姉）に料理を教えるも
らつたり、宿題をしたりした。

そして冬休みも終わりを迎えた。

あの光景を見て以来、暇があればあの小さな岬に行っている。

そして三学期が始まつて数日がたったある日、その人はいた。

いつものように商店街の裏の林をぬけてあの岬にきた。

そこには一人の女の人があった。

どうやら泣いているようだった。

なぜ泣いているのか気になったがなぜかそつとしておいた方がいい
と思ひその場をあとにした。

三学期は本当に退屈だった。

冬休みにコウの家に泊りに行ったのでこんどは僕の家に一泊二泊
まることになった。

この二日間はコウとチェスをしていた。コウは強かったが僕も負け
ていない。

二日で大体三千回やり千五百勝千五百敗。コウは最初にクイーンをつぶす先方だった。そして僕はビシヨップやポーンなどをキングから遠ざけてとことん追い詰める作戦だった。またそれがうまくいくこともあればいかないこともある。たとえうまくいっても、負けることもあった。

そして互角の勝敗にも飽きた頃、外には雪が降っていた。

今は二月、別に雪が降るのは珍しくはなかった。

翌日月曜日。

僕とコウはまたいつもと変わらない日常を送る。

春休みも終わりとうとう今日から三年生。

そしてコウにとっては重大な日だった。

「おはよ、ユウヤ。」

「ああ、おはよう。今日だろ、告白するの。」

「うん、そうだよ。」

「がんばれよ。」

「うん。」

今日はコウが金沢アキコに告白する日だった。

そして、成功したらあの岬に行くんだ、コウとアキコが二人で。

そして登校ルートの中にある、大きな十字路にきた。その十字路は

この時期には桜吹雪きがとても綺麗だ。

歩行者の信号が青に変わり横断歩道をわたる僕とコウ。

「あ、猫。」

コウが言い猫に近づく。

「おいコウ、先行くぞ。」

その時、僕は横断歩道を渡りおわっていた。

「今行くよ。」

「ああ、でも先に歩いているよ。」

と言い僕は後ろを向く。

バタッ！

後ろから何か倒れる音がした。

僕は後ろをふりかえると、あたりの桜の花びらが突然赤く染まりあがった。

そこにはコウが横たわっていた。

「おいコウ、どうしたんだ。」

すると偶然にも向こうからアキコが来て。

「どうしたのコウ、ユウヤ。」

「知らん、突然倒れたんだ。」

「とにかく救急車を呼ばないと。」

そして電話してから二十分後、救急車が来てコウが病院に運ばれた。

コウが運ばれた病院はあの商店街よりもっと向こう側にある病院だった。

僕とアキコはコウの運ばれた救急車に乗せてもらい病院に行った。

コウは病院に入院することになった。原因は肺ガンによる発作だ。

医者は思ったよりガンが広がりすぎている。って言っていた。

手術をしても、成功する確立が低く、しかも成功したとしても何らかの障害が出るらしい。

病室は海の見える病室だった。

「いい病室じゃないか、コウ。」

ベッドには一命をとりとげたコウがいる。

「うん、たまに海を見たりすれば退屈じゃないよね。」

「そうだな。」

「一カ月。」

「ん？」

「手術をしなかった時の僕の寿命だよ。手術に成功すれば十年以上。

失敗すれば……。」

「言わなくていい。」

「うん。」

「……。」

「……。」

沈黙する病室、窓の外を見るコウ、ただ立ちすくむ僕。

「手術、受けようかどうか迷っているんだ。」

「何言ってるんだよ。受ければ、」

「怖いんだよ！死ぬのが。」

「……。」

思わず黙り込んだ。コウが怒鳴るところを始めてみたから。

「手術に成功する確立は八パーセント。」

「あ、山口先生。」

「友達か？」

「そうですよ。」

「桜井コウヤです。」

「コウの担当医の山口トシヤだ、よろしく。」

「どうも。」

「コウ、よく考えることだ。これは一種のギャンブルと一緒にだ。」

「先生、たとえば悪いですよ。」

「他にどうたとえればいいんだ？」

「宝くじとか。」

「コウヤ、それもギャンブルだよ。」

「そうだ。しかも宝くじが当たるより成功確立が低い。」

「山口センサー、どこですかー？」

「じゃあ、俺はこれで失礼する。」

そういい、山口先生は病室を出ていった。

八パーセント、二十五人中二人前後の生存。

そんな過酷なところをさまよっているのか、コウ。

コウの残りの寿命、三週間。

「ねえ、コウヤ。コウの様子はどうなの？」

そこには金沢アキコがいた。

「今は大丈夫だけど。」

「そうなんだ、よかった。」

「手術をすれば寿命がのびるらしいけど成功する確立がかなり低い。」

「

「大変なんだね。」

「うん、そうだよ。」

「ごめんね、コウのお見舞いに行かなくて。」

「なぜ？」

「恐いんだよ、コウがいなくなるのが。もう会えなくなるのが。」

そのとき僕は感じた。

「なら今日行こうよ、お見舞い。」

「だめだ、強制だ。絶対つれていく、コウは淋しいんだよ。窓から

見るだけの景色は。」

「わかった。」

「コウ、見舞いにきたぞ。」

「うん、ありがとう。」

「こんにちわ。」

「あつ、アキコさん。」

「ちよつとトイレ行ってくるから二人でなんか話しててよ。」

病室に入ってすぐ退室した僕。とにかく二人きりにしてやりたかった。

病室を出てすぐ一階のロビーに行った。

この病院は四階建てだがなぜか四階は立入禁止になっている。看護士にきいてみると重病患者がカクリされてるらしい。そういえば前にそんな話を聞いたことがあったな。確かあれは七階……まあいいや。

それにしても退屈だ。なんもすることがない。

そして十分たち病院内が騒がしくなった。

胸騒ぎがした僕は急いでコウの病室に向かった。

コウの病室の前にはアキコが立っていた。

「どうしたんだよ。」

「コウの発作が突然おきたんだ。」

「突然ね。」

「発作が起きる前にコウに告白されたんだ。」

コウはやっぱりしたんだ。よかった。

「それで返事は？」

「もちろんYESだよ。」

「そっか、それはよかった。」

手術室前。

コウ、おまえ告白したんだってな。それでOK出してくれたんだよ。だからかならず生きるよ。

コウの手術が始まってから三時間がたった。

でも一行に終わる気配はない。

僕は手術室の前でアキコと一緒に待っていた。

すべてが白黒に見えた。

色とりどりの雑誌も、蛍光灯の光も赤い本棚も、緑のラインも、すべてが白黒だった。

外から光も差し込まない頃、時間というものがわからなかった。

「そろそろ帰らない？」

「そうだな、まだ時間がかかりそうだし。」

外に出るともう日は沈み春の星空が広がっていた。

その中に浮かぶ満月、何かいやなことが起きなければいいけど。

翌日、コウの姿を見たのは病室ではなく、手術室でもなかった。葬儀室だった。

コウの顔に白い布がかけられていた。

手術中に発作が起こったらしい。

コウの死、それは僕にとってもアキコにとっても大きな出来事だった。

コウの死を知った日の夕方、僕はあの岬で一人たそがれていた。どうしてあの時、帰ってしまったのか、でも帰らないで待っていても変わらなかったであろう。

どうして、死ななきゃいけなかったのか。

たった十七年しか生きてないんだよ。

まだ、これからの人生だろ。

なんでつれていったんだよ、神様。

そんなに生きちゃいけなかったのかよ。

コウの命を返せよ。

僕はずっと泣いていた。

まだ日の上らない真っ暗な空に向かって、僕はいつまでも泣き続けていた。

完

月の光 一

月の光は残酷だ。

何もかも持っていきやがる。

まずコウの命をもつていきやがった。

そしてあいも。

そしてこんどはあいつも。

僕の友人コウの死をしった翌日。

ある二つの机の上に二枚の写真が置いてあった。

その黒い額縁と菊の花はその席の持ち主の死を語るものだった。

一枚はコウ。

もう一枚は、金沢アキコだった。

おそらくコウの死のショックで自殺したんだろう。まあ、それも仕方のないことだ。

先生が来る。

「みんな、席に着け。今日は悲しい連絡がある。」

知ってるよバカ。

「このクラスの山崎コウと金沢アキコが死にました。山崎は交通事故、金沢は病死だ。」

その時、僕は立ち上がった。

みんなは黙った。

「何言ってるんだよ！このバカ教師。アキコは自殺、コウは肺ガンによる病死だ！」

先生は目を丸くして

「そうなのか？」

「そうだよバカ教師、連絡ぐらいちゃんとしろバカ教師。いや、教師ともいえないな、バカ。学校なんかやめちまえ。」

「うっ。」

「おまえに何がわかる。大切な親友とただ一人の幼なじみをなくした僕の気持ちなんて。」

「すまない。」

「ったく。」

席に座った僕。

微妙な空気が教室に流れる。

再び一人になった僕。

これからどうしよう。

僕はいつものようにあの岬にいた。

これからどうしよう。

グレーにそまつた空の向こうに行きたい。

そう思いながらその曇り空を見ていた。

「ねえ。」

すると、

「どこを見ているの?」

するとそこには一人の少女が立っていた。

「アメリカかな。」

「そっちは逆だよ。」

「地球は丸いんだから西東関係ないだろ。」

「たしかにね。となりいい?」

「いいよ。」

すると僕の隣に座ったその少女。

「あなた、前にあったことがあるでしょ。」

「え?」

「ほら、去年の夏、コンビニで。」

「ああ、あの時の。」

でも、今の彼女はあの時の彼女とは大きく違っていた。

あのきれいな黒い髪が真っ白になっていた。

グレーに染まる空にうかぶ白い髪。それはまるで景色の一部分のよ

うだった。

「兄さんの友達だったんでしょ。」

「兄さん？」

「山崎コウ、私の兄さん。兄妹なのにお互い顔も知らない、話したこともない。また存在も知らなかった。だから今生きている私がお兄さんのことを知っておきたい。だからあなたに話し掛けた。」

「ってことは君はヒサエ？」

聞かなくても知っていた。だけど聞いておきたかった。

「あなたには関係ない。」

そんな答えが返ってくるとは思っていなかった。でもたいして答えを気にしていたわけではなかった。

「さあ、早く教えて、兄さんのこと。」

僕はコウとの出会い、京都旅行、お互いの家に泊まりに行ったこと、そしてコウの恋人のことなどを話した。

でも、ヒサエは無表情で話を聞いていた。

「大したこと無い兄さんだったみたいね。」

「いや、そんなことなかったと思うよ。」

するとムツとした顔をして、

「私のほうが重い病気だよ。」

「そうなのか？」

「うん、私は肺ガンとエイズにかかっているの。」

「そうなんだ。でもコウはエイズにはかかっていなかったよ。」

「兄さんとは親違いの兄妹なんだよ。」

「ふーん。どこの病院に入院してるの？」

「兄さんと同じ病院だよ。何でそんなこと聞くの？」

「コウは僕の大切な友人だ。そしてその家族もまた同じようなものだ。コウの分も幸せになっしてほしい。」

「それって、」

ヒサエの顔が赤くなった。

そのとき僕はあることをしたことに気がついていなかった。

「そろそろ病院に戻らないと、またね。」

「ああ、またな。」

そしてヒサエは病院の方に歩いていった。

家に帰るといつも飼っている猫が迎えてくれる。

何を考えているのかわからないが、僕の足に顔をこする仕草がとても可愛らしい。

その猫には名前はない。その猫の名前はその猫だけが知っている。もしかしたら自分の名すらないかもしれない。

その猫はいつも姉、レイナの膝のうえに寝て、僕が家に入るときやトイレ、ご飯のときに膝からおりる。

現在、その猫は十二歳、僕が五歳のときに生まれた。

目の見えない姉のために飼い始めた猫、彼女はその猫の微笑みを知っているのだろうか。

「姉さん、入るよ。」

「どうぞ。」

姉さんはいつもお気に入りのおもちゃのロッキングチェアに座っている。その姿がまるでお婆さんに見えるが、二十歳という若さだ。

姉さんの目が見えなくなったのは十歳の頃だ。僕と姉さんのふたりで散歩に行ったときのこと、突然姉さんが叫びだし僕がそれに驚き大泣きしていた。そんなときに一組の夫婦が声をかけてきてくれた。姉さんは落ち着きを取り戻し自分の目が見えないことをふたりに伝えすぐに病院にむかった。

目が見えなくなった理由は目から脳をつなぐ神経が切れたことによつて見えなくなった。

手術をすればかなり低い確立で治るらしい。

だが、失敗したら・・・、脳細胞が停止。つまりそれは死を意味する。

姉さんは手術をしなかった。目が見えなくなっても生きてけるからだ。

だからそんな姉さんの世話を僕はしている。学校に行っている間は召使がしてくれる。

休日はすべての時間を姉さんの世話をする時間に使っている。たまにコウと遊びに行く時間があったがその間も召使が世話してくれていた。

部屋に入るといつものようにロッキングチェアに座り猫をなでていた。

姉さんのそのやさしい目にはあの時の暗やみの恐怖はなかった。

「ねえユウヤ。」

「どうしたの、姉さん。」

「もうすぐ私の誕生日よね。」

「うん、何かほしいものでもあるの?」

姉さんの誕生日は五月七日だ。

「ええ、赤いバラを一本。」

「え?一本だけ?」

「うん。」

「わかった。」

バラは五月七日の誕生日花で花言葉は『美、愛情、内気な恥ずかしさ』だった。

たしかに姉さんにぴったりな花だ。

「あと、トゲはとらないでね。」

「うん。」

誕生日であるバラ。

でも一本という本数とトゲつき、これは何を意味するのだろうか。

再び僕はあの岬にいた。

いつものように座って足をぶらぶらさせながら空の彼方を見ていた。

今日は晴れ。あちこちにいろんな形の雲が空を流れていた。

海の波は穏やかで風が弱いことを語っていた。

そんないい天気と学校をさぼってここにいる。

「早いね。」

そこにはヒサエがいた。いつものように長い白髪をなびかせて。

「うん、今日は学校をさぼったんだ。」

「学校？なにそれ。」

「学校を知らないのか？」

「うん、物心ついたときから入院してたから、外のこととはまったくわからないんだ。病院の近くの売店には行くことがあるけど。」

「ふーん。」

「もちろんここにもね。」

「うん。」

「。。。。。」

「。。。。。」

会話が無くなった。

そもそもヒサエがここに来るのは毎週一回、最近は三回くらいかな。それにしても学校を知らないなんて、相当退屈な毎日を送ることになる。

「ねえ。」

「ん？」

「今から売店に行かない？」

「売店って、さっき言っていた？」

「うん。」

「そうだな、行ってみるかな。」

「じゃあ、行こっか。」

売店はヒサエが入院している病院から徒歩五分。

見かけはいたって普通の売店だった。

中には白衣を来ている人がいた。おそらく病院の医師だろう。そしてそのなかに山田先生がいた。

「おっ、久しぶりだな桜井。」

「はいそうですね、山田先生。」

「わるかったな、死なせちまって。」

「いえ、仕方ないですそれは。」

「俺もまだまだ未熟だな。」

「こんにちは、山田先生。」

「おつ、ヒサエじゃんか。なんだ？ユウヤとデートか？」

「ええ、そんなとこです。」

「そんなとこです？僕はヒサエとデートしてるのか？」

「。。。。。」

「どうしたの、ユウヤ。」

「いや、なんでもない。」

「じゃあ、早く行こ。」

「ああ、わかったよ。それじゃ山田先生、さようなら。」

「ああ、またな・・・あとで病院前にきてくれ。」

最後につぶやくように言い去っていった。

その後、本を見たり、食品を買った。

ヒサエが病室に帰ったあとに病院の前に行くと山田先生が寒そうに待っていた。

「すいません、寒いなか。」

「かまわんよ、ところでヒサエはやっぱりあの岬であったのか？」

「そうです。まずいんですか？」

「いや、あいつはもう助かる見込みが無いんだ。だからうちの病院の連中はみんなあいつを見捨てたんだ。だから好きに行動させている。」

「え？でもそれってひどいじゃないんですか？」

「ああ、でもガンとエイズの両方かかっているともう手のほどこしようがなくなる。エイズは進行を押さえる薬を使えばなんとかなるが、ガンは二つともガン細胞が肺の半分を侵食している。もう手術しようがない。」

「そんな、そんなことって。」

「でも一つだけ助ける方法がある。」

「本当ですか？」

「ああ、でもこれは奇跡を起こすしかない。生存率一兆分の一パーセント。ガンの自然回復しかない。」

「自然回復？」

「そうだ。ガンはきまぐれで、ごくまれに自然に治っているケースがある。だがこれはまだ手術でなおせる程度の症状の人がいつのまにか治っていたのがある。その原因は不明。さらにヒサエの病状、残り寿命の五年。それらを考えると生存率はそのくらいだ。そこでだヒサエのことを頼みたい。生きるにしろ死ぬにしろ、あと五年、残りの人生楽しんでほしいからな。一先ず、週に一回この病院に通うようにしろ、エイズの薬を取りにきてくれ、代金はヒサエの家族からもらっている。」

「わかりました。」

「あと遠出するときは連絡しろ。」

と言われ一枚のメモを渡された。

そこにはメールアドレスが書いてあった。

「それが俺のメールアドレスだ。なんかあったら連絡してくれ。」

そういつと病院に戻っていった。

「あ、そういえば今日は姉さんの誕生日だ。バラを買いに行かないと。」

その後、病院の近くにある花屋に行った。

その花屋はクリーム色の壁にピンク色のマストのいかにも花屋らしい色鮮やかな店だった。

「いらっしやいませ、あらユウヤさん。」

「あ、カズミさん、お久しぶりです。」

「ええ。」

「お気の毒でしたねコウのこと。」

「いえ、いつかそういう日が来る事は覚悟してましたから。ところ

で何の花を買いいますか？」

「バラを一本ください。トゲは取らないでください。」

「わかりました。誰かにプレゼントですか？」

「ええ、姉が今日誕生日なんです。」

「そうですか。はい、百円になります。」

「どうも。ここでバイトしてるんですね、てっきりOLとかしてる
と思いました。」

「私、花が好きなんでこの仕事をしているんです。」

「そうですか。じゃあまた。」

そう言いその花屋を去った。

月の光 二

家に帰ると姉さんがいつものように膝に寝ている猫をなでている。

「バラ買ってきたよ。」

「ありがとう。」

暖炉の上にある一つの花瓶をとり、その中に水をいれてトゲのついでるバラをいれた。

真紅に染まるバラの色は何か姉さんが僕に言いたいことでもあるのかな、と思った。

「散歩に行かない？」

僕は言った。

「そうね、言ってみようかしら。」

僕は部屋のすみにある車椅子を姉さんがそれに乗る。そして車椅子を押し外に出た。

天気は晴れ。

外は春なのにまだ冷たい風が吹く。

近くの公園の前を通りかかった。

「昔、よくこの公園で遊んだよね。」

「姉さん目が見えるようになったの？」

「いえ、違うわ。」

「そっか。でも何でわかるの？」

「桜の木の匂いが、よく覚えてるの。ここ一本の桜の木。」

「桜の木の匂い？」

「うん、そうだよ。桜の木には匂いがあるんだよ。」

すでに桜の花は散っても桜の木はまだ散っていない。

僕は桜の木の匂いはわからない。姉さんの言う木の匂いは一体なんだろう。

その後、商店街と図書館に行った。
図書館から出るともう夕方になっていた。

「そろそろ帰ろっか。」

「いや、最後に行きたいところがあるんだけど。」

「じゃあその場所に行こ。」

行きたい場所はあの岬、姉さんにあの場所を教えてあげたかったから。

その岬は夕日が出て、赤く染まっていた。

僕はいつしかここに置いたベンチに座り、姉さんはその隣に座っていた。

海の方この水平線には夕日が堂々とうかびそのそばに寄り添うように月が見える。

日に近づくな死神め。

僕はそう思った。

太陽はすべてを生み出し、月はすべてを奪う。そんな理解不能な考え、いいことだとは思えない。でもコウを僕の前にあらわれたのは太陽のおかげで、月のせいでコウが死んだ。ただそう信じたかった。

「ここはきれいな場所ね。」

「うん、僕が一番好きな場所。」

「いろんな匂いがする。動物の匂い、すんだ空気の匂い、植物の匂い。いい場所ね、ここは。」

「僕に一人の友人がいたんだ。」

「あら、珍しいわね。ユウヤに友達ができるなんて」

「ああ、確かに。でも、その友人は肺ガンで命を落とした。もし、今生きていれば、そいつもこの場所につれてこようと思っていた。

この場所のよさを教える、いや気付かせることができたのかもしれない。」

「そうかもね。」

すると、病院の方からヒサエがやってきた。

「あ、ユウヤ。」

「おう、ヒサエ。」

「その人だれ？」

「ユウヤの姉、レイナです。」

「ユウヤの恋人のヒサエです。」

「恋人いたんだね、ユウヤ。」

「ちょっとまでヒサエ、いつおまえに告白したんだ？」

「言ったじゃん、兄さんの分も幸せになってほしいって。」

「あれはそういう意味じゃなくて。」

「じゃあ、私のこと嫌いななの？」

「いや・・・、べつに・・・、好きだけど。」

「決定ね。さあ、喧嘩しないで仲良くしなさい、あなたの友人のためにも。」

「そうだね。」

その後、ヒサエは僕と姉さんの家に行き夜になるまで話していた。

ヒサエが家に帰るから僕もついてく事になった。

外はとつくに日が沈み真つ暗だった。

「いいお姉さんね。」

「そうだよ、姉さんのおかげで何度も助けられたよ。悲しいときは励ましてくれて、いじめられたときは守ってくれて。そんな姉さんだから目が見えなくなつてから僕が守つてやる、慰めてやるって思つて必死に頑張つたんだ。最初は大変だったけど。」

「恩返しつてやつ？」

「いや、たった一人の家族だったからそれは当然のことだよ。」

「両親は？」

「父さんは逃げたよ。母さんが僕を産んでから。母さんは姉さんの目が見えなくなつてから一カ月後に逃げたよ。」

「お金はどうしたの？」

「母さん側のお爺さんお婆さんの保険金でなんとかなってる。」

「あのお手伝いさんは？」

「あの人は住むところがないからここに住み込みで働いている。無論、彼女の頼みでね。」

「ふーん。」

商店街の前を通りかかった。

「ここいらへんでいいよ、ありがと。」

「最近物騒だから気をつけろよ。」

「うん。」

そして数か月がたった十月、そろそろ本格的に受験勉強をしてい
かないといけない時期になった。

まわりにいるクラスメートも日に日にピリピリしてきた。

僕の志望校は近くの私立の医学系の大学で受験科目は数学、英語、
化学だった。

僕は近くにある本屋で買った問題集をやっていた。

まず苦手な英語を、特に英作文をできるようにしないと。

長文はなんとかなるけどやっぱり英作文は苦手だ。

うちの学校ではセンター試験が近くなると後半の授業がすべて自習
になる。無論、うるさくするやつは誰もいない。

そんな中、勉強していた。

だれもしゃべらないのでいろんな音がする。

ペンを紙に走らせる音、本のページをめくる音、ときに廊下から響
いてくる足音、一年か二年かわからないが外で走っている音、他学
年の生徒の話し声、いつもは聞くことのできない音がもしかしたら
聞き取れることができるかも知れない。

でも今は勉強をすることに専念したい。今は一秒でも有効的に使
いたい。

そうして休み時間のチャイムがなった。

休み時間になつても席を立つのは一人、二人くらいで他の人はみんな勉強を続けていた。それだけみんなは必死なんだ。相変わらずコウとアキコの席はきれいで誰かが使っていた痕跡はない。

たまに僕は二つの机に触れ、二人のことを思い出す。そういえば、先月のとある日にクラスメイトにコウのことを聞かれた事があつた。

暑い夏がすぎ感想の季節の秋になつた。

九月のとある日、ある男子一人が話し掛けてきた。

クラスの中でむかつく存在のやつだつた。

いつもチャラチャラして、髪なんか茶色にして、都会人面しているやつだ。

「なあユウヤ、」

「。。。。」

「おいユウヤ、」

「。。。。」

「コウってさどついうやつだつたんだ？」

「。。。。を。。。。」

「へ？」

「何をいまさら、そんなことを聞いてどうする！どうせいつものようにバカにすんだろ！」

「そんなこと。」

「黙つてお前を見てるといつもそつだ。カツアゲ、おどし、陰口、いじめ、喧嘩、それ以外に何をやってるんだ！何にもわかってないくせに。コウのこと、おまえは何もわかってない、そつだろ！」

「確かに、俺はいいことをしているわけではないけど、何もわかってないけど、でも幼なじみとして知っておきたかつたんだ。」

そいつは目に涙を浮かべそつ言つた。

「仕方ないな。」

僕はコウの事を少しだけ話した。

「そうだったのか。そういやお前、俺の事嫌いだよ。」

「大嫌いだ。」

「どこが？」

「髪の色、匂い、性格、態度。」

「要するに全部だよ。」

「そうだ。」

「俺さ、人間って外見じゃなく中身だって思ってるんだ。ほら俺見かけそこまでよくないだよ、オシャレしてるわりには。」

「それってわざとだったんだ。」

「違うよ。少しは見なおしてくれたか？」

「全然。」

「そりゃないよ。」

それ以来、そいつと目を合わせたことはなかった。

放課後、妙なことを耳にした。

「校門のところにすごい美人がいるんだぜ。でもなんで髪が白いんだろ。」

と、一人の男子が言っていた。

白い髪、もしかしたらヒサエの可能性が高い。

僕は走って校門に行った。

そしてそこにはヒサエがいた。

「どうしてここに來れたんだ？」

「え？タクシーに乗ってきたんだよ。」

「そうか、歩いてきたわけじゃないんだな。」

「そんなの無理に決まってるじゃん。肺ガンプラスエイズにかかっているんだよ、死んじゃうって。」

「お前ならありうる。」

それにしても後ろからの視線が痛い。

「早く帰るぞ。」

「うん。」
「その後、タクシーを捕まえて家に帰った。」

月の光 三

正月、僕は姉さんとヒサエを誘って初詣に行った。

「あけおめ。」

「おめでと。」

「あけましておめでとございます。」

相変わらず姉さんは車椅子に乗っている。

今日きたこの神社は階段が無いので車椅子でお参りができる。

入り口である鳥居から一直線に道が延び五十メートルほど先に神社のお賽銭箱がある。

今日が正月だからいろんな屋台がある。

金魚すくい、林檎飴、射的など縁日でやるような屋台ばっかだ。

神社の前ではお守りやおみくじが売っている。

神社の裏には弓道所があり頼めば射たせてくれる。

姉さんが射ちたいという強い頼みをされたので帰りぎわにでも行くと思う。

「ヒサエはここにきたことはある？」

「ないよ。ずっと病院にいたから結構楽しみ。」

「それはよかった。」

「うん。」

すると劇場の舞台の裏が騒がしいのに気が付いた。

「どうしたんですか？」

そこにはアキコの父さんミツオがいた。

「ああ、ユウヤ君か。実は舞台上で舞う人が怪我しちゃって舞えそうに無いんだ。」

「どういふ舞いなんですか？」

ヒサエが言った。

「俺もよくわからん。何でもいいとにかく舞えれば。」

「じゃあ、私がかわりに舞いましょうか？」

「ちよつと、ヒサエ。」

「大丈夫、二、三個くらい舞える舞があるし、体の調子もいいから。」

「わかった。でも気を付けろよ。」

そして五分後、衣裳をまとったヒサエが舞台にあがった。

竹笛、太鼓、琴、三味線。日本で使われている楽器が一つの曲を生み出し、それと同時にヒサエが舞に入る。

右手にもつ扇を開き、ゆっくり移動させる。

そして前進、右折、後進、その動きは何を意味するかはわからないが、舞台に立つヒサエは今までに無く美しかった。

ヒサエが舞い終わり舞台から戻ってきた。

「お疲れ、ヒサエ。」

「うん、本当に疲れたよ。飲み物でも買ってこようかな。」

「そうだね。姉さん先に弓道所に行ってるよ。」

「わかった。」

するとヒサエは人込みの中へと歩いていった。

弓道所。ここで弓道を行う人は少ない。

昔はたくさん人がいたが今はほとんどいないので弓とか矢は頼めば貸してくれる。

「あのー、すいません。」

「おう、ユウヤじゃん。」

「なんだ、マサルか。」

弓道所には幼なじみで親友の沢田マサルが一人で弓道の練習をしていた。

中学のとき僕とマサルは弓道部に所属してお互いに競い合っていた。

今、僕は初段、マサルは二段だ。

「今日はどうしたんだ？」

「いや、姉さんが射ちたいって言うて。」

「え？でもユウヤの姉さんは目が見えないんじゃない？」

「まあ、大丈夫でしょ、たぶん。」

そう話しているうちに姉さんは弓と矢を選び終えていた。

「どこで射てばいいの？」

僕は姉さんの手を引き射つ場所を指定した。

「じゃあ、射つていいよ。」

すると姉さんは慣れた手つきで弓を引いていき見えない目でねらい矢を放つ。

矢は一直線に飛んでいき的の上に刺さった。

「おしいつ。もうちょい下。」

すると再び弓を引き矢をはなつ。

矢はさつきよりじゃっかん下に飛んでいき的に刺さる。

あたった場所はど真ん中。

その後、姉さんは計三十射を射ちそのうち二十三射真ん中にあたった。

僕は十五射、マサルは十八射。

とてもじゃないけど姉さんにはかなわなかった。

「すごいよ、姉さん。」

「なんか心の目で狙ったって感じだな。」

「これなら段を狙ったら結構いいところまでいけるよ。」

「いいよ、段なんて。たぶん私には必要ないから。」

「そっか。」

「おーい、ユウヤー。」

やっとヒサエがやってきた。

「遅いぞヒサエ。」

「なんだ、無愛想なおまえに恋人なんてできたのか。」

「別に黙ってたわけじゃない。」

「まあ、そんなこと気にしないがな俺は。」

「そろそろ帰りましょ。」

「そうだな。またな、マサル。」

「ああ、またな。」

親友にあいさつをかわし、弓道所をあとにした。

扉から出るときマサルが

「ありや、両手に花だな。」

と言った気がする。

こんな感じだった。

コウが死んでもヒサエと姉さんがいることに僕は生きている実感がもてた。

あの岬についた。

あれから八年たった今。

医学大学のセンター試験に合格しその後、順調に成績を上げていった。

ヒサエの病状は少しずつ回復している。

今はどうかはわからない。

だが三日前、とんでもないことが起きた。

その日は雨。

天気予報によるとあと二日は降り続くという。

身仕度を終え部屋から出る。

現在十時。

廊下はやけに静かだ。

キッチンにむかう、おそらく召使いのカズヤさんがいるはず。

カズヤさんは召使いの中でも最も影が薄く真面目だがけて目立たない。

でも名前をいえばだれもがその人を知っている不思議な人だ。

そんな彼を僕は尊敬していた。

キッチンにきた。

誰もいなかった。

静かにたたずむキッチン。
そこにはカズヤさんの姿はない。
仕方がないので姉さんの部屋にむかった。

赤いバラ、その赤色は美しさに見とれ茎をもったとき刺さった
トゲが吸った人の血なのか？

赤い光景。
横たわる姉さん。
赤くなつた包丁。

それを手でぶら下げるかのようにもつカズヤさん。
その光景に僕は現実感がなかった。

これは夢だ。
そう何度も思った。

でもそう現実には甘くなく徐々に体温がなくなっていく姉さんを見て
いることしかできなかった。

「何でなんだよ。姉弟なんだぞ。好きになるなんてことはできない
んだ。そうだろご主人。」

「。。。。」
言葉を口に出すことができない。

カズヤさんは右手にもつ包丁を自分にむけ腹を貫く。

「俺はレイナさんのことが好きだった。だれどご主人、あんたを選
んだ。」

「でもそれは姉弟として。」
「姉弟としてじゃない一人の男性としてあんたのことを愛している
と。」

カズヤさんはゆっくりと前に倒れ絶命した。

その後、救急車がきて姉さんが病院に運ばれ緊急手術が開始されたが
三時間後、心搏停止、死亡した。
空には満月がきれいに光を照らしていた。

日食の光 一

日食の光、暗やみのなかあるはずもない光、その色は金剛石のようきれいに輝く。

姉さんが死んでから三日後である今。

今日は日食。

ふと日を見てみると面積の半分以上が月に隠れてた。

僕は今、あの岬に向かってる。

まだ昼ごろなのに薄暗い風景。

この光景を絵にしてみたいと思うが今はそんな余裕はない。

今はただあの岬に行きたかった。

駅をよこぎり、川にかかる橋を渡り、商店街の前を通り、あの岬にきた。

あの岬にくと完全に日が月に隠れまわりからダイヤモンドリングを描いていた。

そんな暗やみのなか、僕はベンチに座っていた。

時間が停止したような気がした。

いつのまにか海に向かって歩きだしていた。

海からここまで約五十メートル。

落ちたら即死か大怪我どちらにしる無事じゃすまない。

その海にゆっくりと身を乗り出した。

風が僕を押し戻そうとするがそんなのお構いなしに死へと身を乗り出した。

すると

「ダメー。」

と、一人の女性の声がする。

足音がしだいに早くなりやがて僕の体を後ろにひっぱった。

後ろに倒れる僕と女性。

その女性の髪を見てすぐにヒサエだとわかった。この暗やみのなかでもなお白い光を放っていた。

その光は薄く、やわらかく光って今にも消えそうだが、やさしく、そしてどこか力強く光っているのがわかる。

そしてそのヒサエの顔からは怒りの表情が出ていた。

「ユウヤが死んだら私はどうすればいいの？私のことを頼まれたんでしょ、山口先生に。」

「知っていたのか。」

「うん。」

「悪かった。勝手に死のうなんて。」

「カズミさんでしょ。三日前に亡くなった。確かにそれで死にたくなるのはわかる。けど、私のことは忘れないで。」

「うん。」

日が出てきた。

日食に終わりが近づく。

ふたたび戻ってきた日の光によってヒサエの白い髪が一段ときれいに光った。

一月、姉さんのいない初詣を終わらせた頃、ヒサエが旅行に行こうと提案した。

医者の仕事に休みは無いに等しいが、院長が特別に一月三日から一月十日の一週間だけ休みをくれた。

どこに行くかは決まっていな。

おそらく道路を車で走るだけになるかもしれない。

でも、貴重な休みの日。

どこかには行きたい。

どうせいくなら東京より向こうに行きたい。

なるべく早く。

薄々感付いている、僕の中の異変に。

姉さんが刺されたときに、コウのことを忘れかけた。
ヒサエのことも、他の友人のことも。
永遠の暗やみが少しづつ近づいてくるのを。

一週間がたった。

車にヒサエをのせさっそく出発することにした。

「どこにいく？」

「新潟の佐渡島なんていいんじゃない。」

「さっそく遠い場所がでたな。」

「いいじゃん、行こうよ。」

「そうだな。」

そう言うのと僕は車を出した。

財布を見る。

中には壹万円札が八枚、佐渡島に行くには十分のお金が入っていた。
車はハイブリッドなのでガソリン代はかからない。

宿はとるのがめんどいから車で寝泊りする。

そんなわけで僕とヒサエは佐渡島に向かった。

ここは鳥取。佐渡島は新潟。その間には富山や長崎などの県がある。
道は地図を見ればわかるがよくわかってない。

もしかすると道に迷う可能性もある。

「そうだ、これに入ってる曲、流していい？」

と、ヒサエは一枚のMDを見せた。

「別にいいけど。」

「ありがと。」

と、言い車にあるMDプレイヤーに入れた。
洋楽だった。

「誰の曲？」

「クイーンだよ。ボーカルはフレディー・マーキュリー。私の一番
尊敬する人だよ。」

「たしかあの人はエイズにかかっていたにもかかわらず、いい歌声

で人々を圧倒させたよね。」

「そうだよ。私はフレディーの歌声を尊敬している。その歌声をめざしていた、あのメッセージシングを私も歌えるようになりたかった。」

メッセージシング？

歌声だよな、たぶん。

「今度、聞かせてくれよヒサエの歌。」

「うん、何なら今歌ってあげようか？」

「そうだな。歌ってくれよ。」

「じゃあ歌うよ。曲は私が作曲した『光』。」

大きく深呼吸し歌いだすヒサエ。

朝起きて 見上げたこの空

冷たい眼差し きみの瞳

なくしたと思ってた

夜空の星

鏡に映る 白い髪

流れる 風

岬にのぼりし この光

朝にも 夜にも

輝きし 日の光

見上げて この空を

見下ろして その海を

不思議な出会い

似ている思い

悲しみを 癒しあい

沢山のことを学ぼう

雲の向こうへ

二人は出会い
そして離れ
僕達は 何に出会う
いなくなる恐怖
目を逸らし
ただ君にあいたい

ヒサエが歌ったその曲はまるで僕とヒサエのことを歌っているようだった。
その歌声を聞き何となくだけドメッセージングの意味がわかったような気がする。
天気は晴れ、流れる雲を見ると鱗雲を思い出す。
コウとはじめてあったときに空に浮かんでいた雲だ。
結局、その三日後に雨が降った。

今はその雲はない。
今はその雲はあってほしくない。
そんなことを思いながら二人を乗せた車は高速道路を走っている。
佐渡島に早くついてほしい気もするが、まだつかないでほしい気もある。
いったいこの否定の気持ちはなんだろう。

鳥取から出発してから三時間たつ。

現在十一時。

この時間になるとまれにお腹を空かす人がいる、ヒサエもその一人だ。

「ユウヤー、お腹空いたー。」

「少し我慢しろよ、もうすぐパーキングエリアにつくから。」

うそだった。パーキングエリアまで三キロ以上ある。そう思ったた。

「あっ、そこ左。」

「え？」

パーキングエリアがあつたがあつさりスルーしてしまった。

「ううー、ゴハンー。」

少し涙目になつたヒサエ。

「仕方ない、ほら僕の左手の指を食べていいから。」

と、冗談半分に言う。

カプッ

ヒサエは本当に噛み付いた。

噛む力には力が無かつた。

ただ加えているだけと言つたほうがいいのかもしれない。

これでヒサエが次のパーキングエリアまでもつてくれればいい。

二十分ほどたちやつとパーキングエリアについた。

「おいヒサエ、いい加減指をはなしてくれないか？」

「うん。」

ヒサエが指をはなし、そして僕達は食堂に向かつた。

「ヒサエは何食べたい？」

「えーつとね、みそラーメン。」

「みそラーメンね。」

五分くらいたちみそラーメンがきた。

「わーいわーい、みそラーメンだ。」

「なんかヒサエって二十歳すぎてからなんか明るくなつたよな。八年前とは大違いだ。」

「そうだね。でもそれはユウヤのおかげだよ。十五のときからずっと世話してくれたから。」

「そうだよな僕達、出会つて十年くらいたつんだよな。」

「そうだよな。・・・ってまさか変なこと考えてない？」

「いや、そんなことないよ。」

だつておまえエイズにかかつているだろなんて言つたら悲しむだらうな。

そうだよな、親からの遺伝だもんな。

「あ、このラーメン、うちの近くの商店街のラーメンと同じ味だ。」

「近くの商店街？そんなのあったっけ？」

「あったよ。しっかりしてよ。」

「ああ、コウと一緒に行ったあの商店街ね。」

「そうだよ。さっ、早くいこ。」

何かが変わた。記憶がとぎれとぎれ消えていく。

なんなんだ、この感じ。

新潟についた頃、高速道路を出、道に迷いながらもなんとか佐渡島行きの船にのることができた。

その船で……………

日食の光 二

ヒサエ

新潟についた。

最近忘れっぽいユウヤだがなんとか船に乗ることができた。でもなにかユウヤの様子がおかしい。

何て言えばいいのだろう、まるで言葉のわからない幼児か、ボケた老人のようなかんじ。

「もうすぐだね、ユウヤ。」

「うん。」

相変わらず、無表情。

船に乗る前からそうだ。

いったいどうしたのだろう。

そして私の頭のなかにある病名がうかんだ。

今夜。

私の知り合いが特別に佐渡島まで送ってくれるってことになった。おそらく佐渡島につくのは明日になるだろう。

翌日、朝起きたらすでに佐渡島についていた。

「ユウヤ、ついたよ。」

「。。。。。」

「ねえユウヤ。」

ユウヤは空を見上げたままポーツとしていた。

そして一言、

「ここはどこ？」

と、言った。

もしかしたら本当にあの病気にかかったのかもしれない。

そう思った私はすぐに病院に行き検査をもらった。

アルツハイマー病。

ユウヤはあのアルツハイマーにかかっていたという。

しかもかなり病状が進行し、医学的な治療は不可能だといわれた。あとは私しただいだと言われた。

今後、ユウヤの世話をしなければならぬ。

もし暴れだしたら思い出の品を与えればいいといわれた。

でもそんなものはもってきてない。

最近のものではダメだ幼いときに遊んでたものや使ってたものなどを与えないといけないと言われた。

だから今手持ちにもっているユウヤの持ち物ではまったく効果がならしい。

ユウヤの持ち物のなかには通帳と手紙があった。

手紙にはこう書いてあった。

『ヒサエへ。もし君がこれを読んでいるのなら、すでに僕は病状が悪化したということだろう。今ここに五億ある。僕を捨ててその五億で暮らしてくれ。ユウヤより。』

その手紙を読んだとき私は自然に涙が出た。

「ユウヤのバカ、そんなの、捨てるなんてできないじゃん。私の肺ガンをなおしてくれるんじゃないの？思い出の品さえもっていればいいのに。」

病院の廊下のいすに座っている私とユウヤ。

「あれ？ユウヤはどこ？」

いつのまにかユウヤは姿を消していた。

アルツハイマーにかかっている人によく見られるじつとしていることができなくなる。

早く見つけないと。

そう思った私は急いでユウヤを探した。

病室、ナースステーション、ロビー、病院のあらゆるところを探したがどこにもいなかった。

屋上、ここが最後だ。

そこには白いシャツがたくさん干してあった。
風が吹きシャツがなびく。

日の光で白いシャツが眩しい。
すると屋上の奥の方にあるベンチに一人の女の人が誰かを膝枕して
いる。

その女の人の後ろ姿に見覚えがあった私は真つすぐ近づく。
見ると膝枕してもらっているのはユウヤだった。

「こんなところにいたんだユウヤ。どうもすみません、私のつれなん
です。」

と、その女の人を見ると。

「あら久しぶりねヒサエちゃん。」

そこには亡くなつたはずのユウヤの姉、カズミさんがいた。

「カズミさん、生きてたんですか？」

「人を勝手に人を死人扱いしないでよ。このとおり元気に生きてる
よ。目も見えるようになったし。」

「そうなんですか。」

横になっているユウヤの顔には笑顔が浮かんでいた。

その笑顔を見ると私は泣きそうになった。

「この子、ユウヤはあと五日の寿命だつてことは知ってる？」

「えっ？」

「さつき、お医者さまがきてユウヤが肺炎にかかり病院に入院する
とあなたにそう伝えてくださいと言つてたの。」

「そうですか。」

カズミさんはいつも猫をなでていた左手でユウヤの頭をなでていた。
ユウヤがああの時の猫みたいだった。

その後、私は佐渡島の小さなアパートを借りてそこで私とカズ
ミさんの二人で住むことになった。

ユウヤは病院暮らし、いろんな世話は病院の人がしてくれる。

私はユウヤが貯めててくれた五億の一部を使いちゃぶだい一つ、ざ

ぶとん二つ、布団二セット、その他食器など生活必需品を買いそろえた。

カズミさんは家にあつたあのロッキングチェアをもってきた。なぜあるのかは知らないが、それだけ大切なものだということにはわかった。

あと猫も飼い始めた。

このアパートの大家さんはやさしい人で猫を飼いたいって言ったらあっさりいいよと言ってくれた。

そんなわけで私とカズミさんのふたり暮しが始まった。

朝起きてまず窓をあけ空を見る。

一日目の朝は快晴。

冬の風が冷たい。

そしてカズミさんを起こす。

相当大切なものなんだろう、カズミさんはロッキングチェアに座ったまま布団をかけ寝ていた。

「カズミさん、朝よ。起きて。」

「んん、あと五時間……。」

小学生の台詞かっつてっつこんでやりたかったがまさか五時間とくるとは思わなかった。

「ほら起きて、ユウヤのここに行きますよ。」

「う……ん、わかったよう。」

まだ名残惜しそうだが、無理にでもつれてこよう。

私とカズミさんは身仕度をし、朝食をとり、そして病院に向かった。

ユウヤの入院している病院は私たちが入院しているアパートから歩いて五分くらいのとこにありすぐに見舞いに行ける。

「見舞いに来たよ、ユウヤ。」

「……うるさい。」

そっついユウヤは窓から空を見た。いや、どこかと奥を見ているよ

うだった。たとえばアメリカとか。
私は問う。

「どこを見ているの？」

「アメリカ。」

さらに私は問う。

「どうして？」

あの時間えなかったことを今問う。

「お父さんかアメリカにいるから。」

「そうなんだ。」

そして来客用のいすを出し私とカズミさんは座った。

「お母さんは？」

さらに私は問い続ける。

「ひどいよ、あの人は。」

そしてユウヤは自分の手元に視線をずらし、さらに答え続ける。

「姉さんにひどいことをするんだ。目が見えないのに料理をさせようとしたり、生け花をさせようとする。そして失敗すると殴ったり、家を追い出したり。個室に閉じ込めたりした。」

「カズミさん、そんなことがあったんだ。」

カズミさんは黙々とりんごの皮をむいていた。

「だからお父さんに早く帰ってきてほしいんだ。」

私は変な質問を試してみた。

「君は今何才？」

「七歳。」

七歳、カズミさんの目が見えなくなってから少したった頃だ。

そして話しているうちにそっぽを向いたまま話していたユウヤだがだんだん心を打ち明けて笑ってくれるようになった。

そして二日、三日とたちユウヤも体調がよくなってきた。

三日目には医者から外出許可もとれるようになったのでカメラをもつて三人で海に行くことにした。

「ヒサエ、早く早く。」
無邪気に走り回るユウヤ。

見かけが二十五にもなるユウヤが子供みたいに無邪気に走り回る姿を何も知らない人を見ると変体みたいに思えるが、私はそうは見えなかった。

病気のことを知ってるからではなく、ただ単純にユウヤの笑顔を見ただけだった。

今までは一緒にいても笑ったりしていたが、その笑顔には表情がなかった、感情が無かった、生きてはいなかった。

輝いていなかった。

でも今は自然で、感情があり、表情があり、生きていて。

キラキラ輝いていた。

そんな笑顔と呼べる笑顔を見て私は嬉しかった。

そして今、今だけでもユウヤが生きていることに私は感謝した。

そして命の大切さを知った。

「元気になってきたね、ヒサエちゃん。」

「ええ、ユウヤは。」

「違うわ。あなたがよ。最近元気よね。」

「わかります？最近、調子がいいんです。」

そう最近調子がいい。

明日にでも検査してみようかな。

その後、写真を一枚とった。

私とカズミさんとユウヤの三人で。

たった一枚だけの思い出。

そんな一枚、おそらくユウヤが死んだあとに見ると涙が止まらなくなるであろうが、ただユウヤの存在を私のなかに刻んでおけるものがほしかった。

四日目、とうとう死への最終警告がきた。

ユウヤは言葉がしゃべれなくなり手足が不自由になった。

話しかけても答えてくれない。
何を聞いても答えてくれない。

話し掛けても私を一目見てからまたどこかを見る。
いわゆる植物人間と言ったところだ。

昼がすぎる頃になると呼吸が自分ではできなくなり、人工呼吸器を使うことになった。

当然、自分で食事ができないので点滴による栄養補給が必要になる。
九時をすぎると、心電図を使いユウヤの最後を待った。

とうとう五日目、病室には私とカズミさんとベッドに横になっ
ているユウヤの三人だけ。

医者がきを使ってくれたのだ。

沈黙する病室、私の心のなかも沈黙する。

何も交渉の手段もない。

まるで死んだようなユウヤを前に私は何もできなかった。

するとその時、ユウヤの手が動いたような気がした。

そしてユウヤを見ると口がわずかに動いている。

私は耳を近付けてみる。

するとわずかながら声が聞こえた。

「ヒサエ、今までありがと、悪いな約束守れなくて。灰をあ岬に
うめてくれ。そして永遠に愛している。」

と・・・

そしてその言葉を最後に心搏が停止した。

私は泣いた。

最後の一瞬だけ記憶が戻ったのだろう。

もう二度と話せない。

あるのは屍という名の脱け殻のみ。

さらになくなる交渉。

もうユウヤは目をあけない。

でも、かつてユウヤだったその脱け殻の顔にはべつに苦もなく、不

満もなく、ただこの世に悔いもないという満足感にあふれる顔をしていた。

その顔に私は怒りを感じていた。
まだ、約束を果たしてないじゃん。
私の肺ガンはまだ治ってないじゃん。

怒りと涙が一緒に出てくるという意味不明な状況において私は何もできなかった。

するとカズミさんが震える私の肩に手を乗せた。
でも、カズミさんは何もしゃべらない。

肩に乗せた手の温もりは暖かくそして懐かしさを感じた。

そして一言、

「ごめんね。」

と言い残し病室を去っていった。

一人取り残された私。

二時間程たった頃、医者がきてユウヤの屍をベッドごともっていった。

医者は、

「お気の毒ですがこれを書かないといけないので、質問にお答えください。」

と言い、出てきたのはユウヤの死亡記録だった。

死亡時間やその時の様子を詳しく聞いてきた。

私はその質問に泣きながら答えた。

いや、もう流す涙は枯れはてて涙なんて出てなかったのかもしれない。

そしてその医者は一枚のレントゲンを見せて、

「昨日の検査結果ですけどガンと見られるものは見当たらなかったのですが。」

「え？」

私は目を丸くした。

あんなに肺が汚染されていたのに。

レントゲンはきれいに肺のなかを透明に映し出していた。
ちゃんとユウヤは約束を守っていたのだ。
普通ではありえないことをユウヤはしたのだ。

そして数日後、ユウヤの遺灰が私のアパートに届いた。

その遺灰をもち私は鳥取に戻ろうと、そう決めた。

佐渡島から本島に、新潟から新幹線で鳥取にもどった。

久しぶりに戻ってきた鳥取、いつもとかわらない日常を送る人たちが行きかうなか私は新幹線をおりた。

そしておりると同時に一匹の猫がおりた。

ユウヤの家にはいた猫。

いつもカズミさんの膝の上で寝ていた猫だ。

その猫は私を見ると人込みのなかに走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2109b/>

太陽の光

2011年10月3日17時52分発行